

## 川野系夏橙の果実形質に関する研究 (第1報) 結果位置と品質について

山 津 憲 治  
(佐賀県果樹試験場)

YAMATSU, K.

Studies on the Quality of Kawano-Natsudaidai.

(1) Relation Bearing Position and the quality.

川野系夏橙は、品質のバラツキが大きく、消費段階で問題となる。本調査は、結果位置と品質の関係を明らかにし、収穫時期の判定と出荷果実の品質の均一化に資するために行った。

### 1. 材料および方法

静岡県賀茂郡東伊豆町稲取、田村又吉氏園、カラタチ台15年生川野系夏橙5樹を供試し、樹冠を高さ別に上・中・下および内成りに、中・下は更に東西南北4方位に分け10箇所に区分し、一箇所より5果を一果毎に昭和44年1月20日～23日に分析した。

### 2. 結果および考察

甘味比は、上、中、下、内成り果の順に低くなった。

方位間には明瞭な関係は見いだせなかった。

第2表 果実重との相関

| 樹NO<br>項目 | 1             | 2             | 3             | 4             | 5             | 全体            |
|-----------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| 可溶性固形物    | -0.634<br>※※※ | -0.205        | -0.207        | -0.419<br>※ ※ | -0.334        | -0.318<br>※※※ |
| Brix      | -0.669<br>※※※ | -0.181        | -0.029        | -0.582<br>※※※ | -0.053        | -0.219<br>※※※ |
| 酸         | -0.561<br>※※※ | -0.664<br>※※※ | -0.705<br>※※※ | -0.705<br>※※※ | -0.702<br>※※※ | -0.550<br>※※※ |

可溶性固形物濃度、Brix とも果実重との間に負

第1表 結果位置と品質および変動係数

| 項目<br>結果位置 | 果実重   |      | 可溶性固形物 |      | Brix  |      | 酸    |      | 可溶性固形物含量 |      | 酸含量  |      |
|------------|-------|------|--------|------|-------|------|------|------|----------|------|------|------|
|            | 平均値   | CV % | 平均値    | CV % | 平均値   | CV % | 平均値  | CV % | 平均値      | CV % | 平均値  | CV % |
| 上          | 310.1 | 10.9 | 11.76  | 1.2  | 10.77 | 3.0  | 1.98 | 15.5 | 16.04    | 10.2 | 2.69 | 17.3 |
| 中          | 285.9 | 12.3 | 11.62  | 3.5  | 10.60 | 4.4  | 2.04 | 12.6 | 14.88    | 12.4 | 2.60 | 13.7 |
| 下          | 265.3 | 16.3 | 11.68  | 4.7  | 10.52 | 5.7  | 2.08 | 14.0 | 13.80    | 16.5 | 2.43 | 15.5 |
| 内          | 227.7 | 19.6 | 12.06  | 5.9  | 10.76 | 6.5  | 2.37 | 12.7 | 12.25    | 18.3 | 2.39 | 18.4 |

果実重は、樹冠上部果が最も大きく、中部、下部の順に小さくなり内成り果は極端に小さくなる。しかしそのバラツキは重さとは逆になった。

可溶性固形物濃度は、内成り果が最も高く、次いで上部で中部・下部は低い。そのバラツキは上、中、下、内の順に大きくなった。

Brix も大体可溶性固形物濃度と同じ傾向であった。

酸濃度は、上、中、下の順に高くなり特に内成り果は高かった。しかしそのバラツキは一定の傾向は認められなかった。

一果実果汁中の可溶性固形物含量、酸含量とも上、中、下、内成り果の順に少なく濃度より果汁量がより大きく影響した。

の相関が認められる。

酸濃度は明らかに負の相関が認められる。

以上の事より、樹冠上部の果実が大果で早熟と考えられ、中部、下部と地面に近づくにつれて果実は小さくなる。特に樹冠内部の果実は小さく、可溶性固形物、クエン酸の濃度がともに高く、後期採取に適した果実と考えられる。又、酸を成熟の尺度とする場合には、大果より随時採取して行けば良いと考えられる。